# 妖狐、海賊の世界へ

はすきるりん

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある世界で妖の王だった妖狐さんがＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの世界へ転生したよって話です。

この物語はつまらないかもしれませんが、決してワンピースを馬鹿にしてるとかそんなことは思ってませんので！

ですが人によっては不快に思うかもしれませんので、そう感じてしまった人はスルーして下さい！

更新不定期ですがゆっくり書いていこうと思いますのでよろしくお願いします！

# 目次


0話 1
1話 5
2話 9
3話 14
4話 22
5話 31

# 0話

「まさか我の配下を全て屠るとは、多少腕はあるようだな人間」
広い空間にただ一つだけある玉座に座り、扉を突き破ってきた者たちを見下ろしていたのは、まるで天使のように美しい容姿をした男だった。
だがその男には人間とは違う特徴があった。
綺麗な銀色の長い髪に映えるケモ耳、そして腰には座っていてもわかるぐらいには大きい尻尾が9本
「残る妖は王であるお前だけだ！覚悟しろ九尾の妖狐！」
九尾の妖狐と言われた男の視線の先には、剣や槍や杖、様々な武器を持った6人の人間
「覚悟しろ？フハハハ！我にそのような戯言を言うとは中々に面白い人間だ。
そうだな、我以外の妖が滅んだ今、この我の命貴様らにくれてやろう。
…だが、手土産もなければ先に逝った奴らに合わせる顔もないだろう」
九尾の妖狐は妖の王であった。王は妖の中で最も強い者が後継者になる。妖狐の一族は先祖代々、尾の数だけ特殊な力を持っていた。
王の尾は9本、つまり9つの能力を持ち、その力で今まで妖たちを支えてきた。
だが人間との戦争が始まってから、配下の者たちは皆人間に殺され、王は孤独になってしまった。
孤独な王など王ではない、そう考える妖狐はある選択をした。
「…何が望みだ!?」
9つの能力の内、必ず一つは先祖代々決まった能力を持っていた。
だが今まではその能力は使う事なく一族はみんな死んでいった。
だから人間たちも妖狐が何をしようとしているのかはギリギリまでわからなかった
「ハッ！決まっているだろう、貴様らの命を！」

「…しまった！」
妖狐は自身の心臓をえぐり取り、思い切り握りつぶした
「さらばだ人間！」
妖狐の視界を眩しい光が包み込んだ。
自分の心臓を潰す事であたり一面を消滅させる自滅の能力。
それを妖狐は使ったのだ。

さぁこれから行く地獄は、我を楽しませてくれるのか
…ろ…
先に行った阿呆共は、地獄でもくだらない事をしているのだろうか
お…ろ…ね…
さぁ早く我に地獄を見せてみろ！
…ろ……つね……き…
…さっきから、やけにやかましい声が聞こえるが…
「起きろ！あほ狐！」
「誰があほ狐だすっとこどっこい！」
「おー！起きたかクソ狐！全くいつまで経っても起きないから、てっきりワシが失敗しちゃったのかと思ったわい！」
「…ええい少し黙れ。貴様の声は頭に響く」
どういうことだ。ここは一体どこだ…そして目の前にいるこいつは何者だ？人の形はしていても顔も何も…
「顔も何も見えない…じゃろ？」
「！貴様思考を…」
「そーじゃよ！だから考えても無駄じゃよ。時間も無駄じゃし、文字数も無駄じゃ」
「文字数とはなんだ」
「こっちの話じゃ気にするな！これこそ文字数の無駄じゃからな。状況を簡単に説明してやろう。
まず、お前は自分の心臓を潰して自滅した。本来なら地獄に行くその魂を、神様であるワシがこちらに引っ張ってきたんじゃよ。
なぜそんな事をしたって顔じゃな。それはまぁ色々あるんじゃが、

お前さんが知る必要はない！
　これからお前さんには、別の世界へ転生してもらう。その世界の特徴は、海賊という海を船で渡る人間がた～くさんいるって感じじゃな！
　ここまでで質問あるか？」
「質問だらけだがまぁいい。俺は別の世界へ蘇るのはわかった。だが貴様が言った、その世界とやらは妖がいるのか？」
「あーなるほどの。まず言うが妖はいない。その代わり、巨人族や魚人、人魚など人種が異なるのはいるがな！
　そしてその世界には特に変わった物があっての。〝悪魔の実〟といって、食えば泳げなくなる代わりに、変わった力が手に入る実がある
　そしてお前さんのその姿を、悪魔の実の力として宿そうと思ってある！」
「悪魔の実の力として…つまりは人間の姿と妖狐の姿、どっちもなれると言うことか」
「そーゆうことさ！そしてまぁ転生の理由はワシのわがままみたいなのもあるからお詫びと言ってはなんだが、お前さんにはさらに〝２つ力〟を与える」
　神様はそう言うと、妖狐の前に２つの実をパッと出した。
「ほう…これが悪魔の実か」
「おー！よくわかったの！そうじゃこれが悪魔の実じゃ！
　これは向こうの世界へ行った時食べるんじゃぞ！あともう一つこれをお前さんに渡したく」
「本？なんだこれは」
「一応この世界には物語というものがある。んでその本にはお前さんにやってほしいこと、ようはワシが気に入ってるやつを物語が壊れない程度に救ってやってくれってことじゃな！まぁ時々本からお願いするから、その時は頼むってことじゃ！」
「我をこき使おうとは流石は神と言ったところか！良い！良いぞ神！中々に面白い！貴様の狙いも多少なり理解した！良いだろう！我が

貴様を楽しませてやろう！」
「おお！話が早くて助かるのうお前さん！流石は妖の王じゃ！
貴様のその素質も含めてちゃんと転生させてやろう！
特別じゃ！本当は転生したら赤ん坊からじゃが、もともと貴様の容姿をワシは気に入っとる！その姿のまま転生させてやろう！
あと大まかなその世界の情報は目を覚ました時に一気に流れ込むようにしておこう！
あとあと、転生先はその世界の知識が大体わかるような所にしておこう！
最後に何か聞きたいことはあるか？」
「ない！早う転生させろ！」
「よーし行くぞ！名前も前の名前でいいからの！それじゃ行って来るんじゃぞ！」
神は持っていた杖を振るうと、妖狐と本、そして悪魔の実二つは光に包まれ消えていった。
「さぁ楽しんで来るんじゃぞ！妖の王・ルーリィエよ！」
こうして九尾の妖は海賊の世界へ転生するのであった。

# 1話

ザプーン…ザプーン！
クァークァークァー
波の音…鳥の鳴き声…
そうか…どうやら、転生とやらが成功した様だな
「ふわぁ～！……うむ、大まかにだがあの神が言った通り、この世界の知識というのが入ってきたな。だが、だからこそ疑問ができた」
今、我の前には悪魔の実が二つ置いてある。一つは『サンサンの実』と言って太陽の力が宿っているらしい。
そして二つ目が『ゴロゴロの実』で、雷の力が宿る実
それはわかったが、どうやらこの世界では悪魔の実の力は一つしか宿せないという情報があった
「あの神まさかしくじったな？我はすでに妖狐の力を実の力として宿していると言ったではないか…
あの神は我に何をさせたいんだ…ん？」
なぜ本が光った？あーあの神の願いだったか。今はそれどころではないと言うのに、中々に生意気な神だな。
『お前さんはその二つの実は食べても大丈夫じゃよ。お前さんがもつ九つの能力のうち、サンサンの実は狐火の上書きで、ゴロゴロの実は自滅の能力が消えた空き分じゃよ。だからその２つは食べて良い。じゃがその他の悪魔の実を食べようもんなら問答無用で死ぬぞ。気をつけてな！　神より』
こう言うことにも使えるのかこの本は。まぁいいこれで疑問は解けた。
「なら頂くとするか」
ルーリィエは豪快に一口で口の中に入れると一回咀嚼した。
「…ぐっ！」
なんだこの味は!?食い物とは思えんほどに不味い！
妖の国でもこれほど不味いものはない！
もぐもぐもぐもぐ…ゴクン！

「はぁ…はぁ…これで力が宿ってなかったら自ら命を経ってあの神を殺してろうか」
実はあと一つ…こうなったら丸呑みするしかあるまい！
我は王だ！この様な果実に臆する我ではない！
ゴクン！
…ふむ、丸呑みなら全然問題ないな。そして、これもあの神の仕業か知らんが、この力の使い方が一気に頭に流れ込んできたな。
「さて、力は得た。あの神が言ったことが本当なら、ここには知識を蓄えれるものがあるらしいが、人間を探さねば始まるまい…まずは村を探すとするか」
あのでかい木の方に人間の気配が密集しているな。とりあえずあの木を目印に進むか
ルーリィエは、しばらくの間この島の真ん中に生えるでかい木へ向かっているとちらほらと人の家らしきものがちらほら見えてきた。
「あれが村か。なら近くに人間がいるはずだが」
「見ろ！あそこに妖怪がいたぞー！」
ん？今あの人間の餓鬼、妖怪と言ったか？この世界には妖はいないのではなかったのか？
「妖怪発見！攻撃開始だ～！」
「やっちまえ！」
「うわー！ようかーい！」
ルーリィエの目線の先には数人の男児が『妖怪』と言いながら、木に座る少女に石を投げている光景だった。
ふむ、あれのどこが妖だ？我には同じ人間にしか見えないが…
まぁ確認すれば良いか
「おい人が来たぞ！」
「やべ！怒られちまう！逃げるぞ！」
「急げ急げ！」
ルーリィエが少女に近づくと、その存在に気づいた男児たちは走って逃げていった。
「おい貴様、いくつか聞かせろ。拒否権はない」

「な、なんですか」
ルーリィエに話しかけられたことに驚いたのか、少女はビクッと体を跳ね、俯いたまま返事をした
「まず一つ、なぜ貴様は妖怪と言われている？人間の皮を被っているのか？」
「わ、私は妖怪なんかじゃない！私はただ…」
少女はゆっくりと左手を上げると、そこから花の様に一本、二本と腕が咲いた。
「悪魔の実を食べて、こんなになっちゃったから…」
「ほう？悪魔の実か。それであの人間の餓鬼共に妖怪だと言われていたわけか」
コクッ
少女は小さく頷くと、先ほど石を投げられて傷付いたのか頭からは血が流れていた。
それに気付いたルーリィエは少女の頭に手を乗せた。
突然のことに驚いた少女は怖くてギュッと目を瞑った
（また痛いことされる！）
そう少女は思い、いつ来るかわからない痛みに恐怖していた。
だがいつまで経っても襲ってこない事に違和感を抱いた。
そして今気付いたが頭の傷の痛みがなくなっていた。
少女は何が起こっているのか分からなくなり、今まで俯いていた顔をバッとあげ自分に声をかけた男を見ると、少女はその男の姿に目を奪われた。
「本当の妖を知らぬ餓鬼が。やはり人間というのは愚かだな」
少女の目には、妖艶な雰囲気を纏う九尾の妖狐の姿だった。
「…きれい」
「フッ当たり前の事をぬかすな人間。これが本当の妖の姿だ、貴様のそれはただの能力にすぎん。貴様は身体に花を咲かせるだけの、ただの人間だ」
その言葉を聞いた少女の目から、ポロポロと涙が流れた。
「おい貴様、なぜ泣く？泣くぐらいなら笑え。例え人間といえど貴様

はガキだ。ガキは泣くよりも笑う方が良い、それは人間と妖も同じだ。だから笑え」
「ぐす…うっ…うん！…ふふっあはははは！」
少女は笑った。特に笑える事があったかと言われれば、そんな場面はここにはない。だが、少女の笑顔は作ったりもなく、本当の笑顔だった。
「ほう…貴様笑うと中々に愛い顔をするではないか。もっと笑え！貴様にはその顔がよく似合う」
ルーリィエの言葉に、少女は顔をぼっと赤く染めた。
初めてだったのだろう、自分の容姿を褒められた事が。
「さて、ここからが本題だがその前に…貴様、名は？」
「ロビン」
「ロビンか。我はルーリィエ。よしロビン、我を知識が蓄えれる所に案内しろ。我は…記憶がない故、この世界を知れる場所がいる」
ルーリィエはそれっぽい嘘を付き、ロビンに説明するとロビンは微塵も疑わず了承した。
「わかった！こっちだよ！」
ロビンはルーリィエの服を引っ張って笑顔で道案内を開始した。

# 2話

ロビンに服を引っ張られながらも、ルーリィエたちは無事に村へとたどり着いた。
そして人が多くいる村へ入るとロビンは、さっきまでつかんでいた服を離し、ルーリィエよりも2mほど前で歩いていた。
そのロビンの様子をルーリィエはじっと見ると、ある事に気づいた。
(この村の人間はロビンへ対し、餓鬼は〝妖怪〟と蔑み、大人は見えないもの、又は人として見ないように扱っているのか。そしてあやつの視線…さっきから親子の様子を羨ましそうに見ているが…推測するに親がいないのか。
しかし、我の姿に人間が見惚れるのは仕方ないが、それ以上にあやつに対する視線が不愉快だな。…どれ、少し遊ぶか)
するとルーリィエはその大きい歩幅で、ロビンとの距離を一気に縮めると、ロビンの脇へ手を通し持ち上げ、肩車の形にロビンを乗っけた
「わ…え?」
ロビンは何があったのかわからなかった。急に体が浮いたかと思うと、ルーリィエの頭をまたがって肩車されたから。
270cm有るルーリィエの身長はこの島にいる誰よりも大きいため、ロビンは初めて村の人たちを見下していた。
村の人たちは全員驚いたのか、アホみたいな顔をしてロビンと張本人のルーリィエを見ていた。
「貴様の歩幅に合わせていたら夜になる。仕方がないから貴様には最高の席を用意してやる。だからさっさと我を案内しろ、ロビン!」
ルーリィエはロビンの名を呼ぶ時だけ声を大きくし、人間たちにロビンの存在を強く認識させた。
そしてロビンも、その鍛えられた頭脳でルーリィエがなぜそのような行動に出たのか理解ができて、またロビンの瞳にはポロポロと涙が流れた。

「あ…あっ…ちだ…よ」
ロビンは大粒の涙を流しながらもルーリィエの道案内をした。
それに対してルーリィエは村の人たちに、覇気にも満たない圧を出しながら、ロビンの誘導に従った。
「あ…あ〝り〝が…ど…ルーリィエ！」
ロビンはギュッとルーリィエの頭に抱きついた。全身を使って包むように。
泣きながら抱きついたため、涙やら鼻水やらがルーリィエの頭に付いてしまっているが、ルーリィエはそれに関して特に言うことはなかったが…
「ええい！手が目に入っているだろうが！もう少し上の位置で抱きつかんか！そっちは鼻だ！上だと言っているだろ戯け！貴様ワザとやっているだろ！次やったらそこから振り落とすからな」
そんなジャレ合いをしながらも2人は、一旦ロビンが住んでいる家へと着いた。
中へ着くと、ロビンを預かっている人たちは、外食に行っているそうだった。
ロビンの夕食には、パンが用意され、そのあとは家事をしてさっさと寝ろという手紙が置いてあった。
その手紙をルーリィエとロビンは一緒に読み、ロビンは席に座りパンを半分にしてルーリィエに渡した。
「貴様はそれじゃ足りんだろう？…仕方ないな。貴様は先に、他の家事を済ませて来い。食事は後だ」
ロビンはその発言に？を浮かべるも、ルーリィエに早く行けと言われ、急いで掃除をした。
しばらくして掃除が終わり、洗濯物を取り込んでいると、家の方からいい匂いがして来たのを感じたロビンは、急いで残りの洗濯物を取り込むと家に戻った。
「はぁはぁ…ルーリィエこれって…」
ロビンを迎えたのは、良い匂いがする様々な料理だった。机一杯に並べられている料理に思わずゴクッと生唾を飲み込むロビン。

「さっさと座れ。目的地に早く向かいたいが食事は一番大事だ。我がわざわざ作ってやったんだ、さっさと食え。それとこの家にも、もう帰らなくて良い。貴様1人面倒を見るなど造作もない」
ロビンは呆気に取られながらも、椅子に座る。ロビンが椅子に座ったのを確認したルーリィエは、ナイフとフォークで貴族のように優雅に食事をしている。
そのルーリィエの一挙一動の動きに魅了されていると、ロビンの顔の前に一口サイズのお肉が運ばれた。
「いつまで惚けている。我はあまり待つのが苦手だ」
すると無理やりロビンの口にお肉を入れた。その瞬間ロビンはあまりのおいしさに目を大きく開き、バクバクとご飯を食べていった。
それを見たルーリィエは広角を少し上げると、また自分の食事を再開させた。
それからは2人とも無言で食事をするも、その場の空気は幸せに包まれていた。
沢山あった料理を綺麗に完食したロビンは、食器を洗おうと皿を重ね始めたが、ルーリィエはその行動を止めた。
「貴様は自室に行き荷物をまとめておけ。ここには帰ってこないし、ここの人間には貴様と生活した記憶を少しいじっておく様にする。食器は我がやる、時間短縮だ」
するとルーリィエの瞳が光ると、食器が青い光に包まれ宙に浮き始めた。
「ルーリィエってなんでもできるんだね」
ロビンは目をキラキラさせながら言うと
「フッ。そんな事言ってる暇があったらさっさと準備しろ。３０秒後には終わる」
ルーリィエは鼻で笑うと、終了の目安を告げた。３０秒と聞いた瞬間、ロビンは走って２Ｆにいき、数少ない自分の持ち物をリュックにまとめ始めた。
３０秒後
「ほう?ちゃんと３０秒で終わらせるとは、なかなかやるではないか、

ロビン。それじゃ早速行くぞ、道案内だ」
ルーリィエはロビンのリュックを肩に背負うと、またロビンを肩車して移動した。
２度目だがまだ慣れないロビンは、嬉しさと恥ずかしさで顔を、噴火するんじゃないかってぐらいに真っ赤にしていた。
時々、黒のワンピースを着ていたため、素肌にルーリィエの触り心地の良い髪の感触がくすぐったい気持ちになりながらも、なんとか道案内をしていた。
しばらくして目的地に着いた２人。
ロビンは急に恥ずかしかなったのか降りようとしたが、そんなこと気にせずルーリィエはその扉を開け中に入った。
すると…
『おめでとうロビー…って誰だー!?』
２人が中に入った瞬間、パーンと何かの破裂音がすると紙吹雪やらが宙に舞いながら、何十人って音がロビンを歓迎した。
だが入って来たのはいつものロビン…ではなく、知らない男に肩車されているロビンだった
「だ、誰じゃお前は!?」
頭が三葉のクローバーのようなシルエットをしている、老人がロビンを肩車しているルーリィエを指を刺して言った。
「ほう、あのでかい木の中が、まさか書庫になっているとは…なかなか面白いではないか」
『完全にスルーされてる!?』
ルーリィエの反応に全員がガビーン！っと驚いているリアクションをとっていた。
「ル、ルーリィエ！この人はここの館長のクローバー博士で、みんなは考古学者って言う学者だよ！みんな！この人はルーリィエ！私のす…と、友達！」
ロビンがルーリィエの頭からお互いの紹介をした。最後何か言いかけたロビンだったが、なんとか持ち堪えたようだ。
「それでみんなどうしたの？」

「ほうほう友達か…あー！そうじゃったロビン！先日の博士号試験‼？見事満点じゃ‼？今日からお前考古学者と名乗ってよいぞ‼？」
その知らせにロビンは満面の笑顔を咲かせた。ロビンの歳で考古学者になれた者など、世界中探しても０に等しいだろう、そんな凄いことをロビンは成し遂げたのだった。
そしてルーリィエにもそれの凄さが多少伝わったのかロビンを褒めた
「ロビン、貴様その歳で学者とはなかなかやるではないか！我が称賛しよう！自分を誇れロビン！フハハハハハ！」
「ほらロビン！学者の証じゃ！」博士はメダルを取り出すと、ルーリィエはロビンを下ろし顎をくいっと動かし「行け」とやった。
それからみんなでロビン合格記念のパーティーを始めた。

# 3話

ロビンが考古学者になった記念にパーティーをしていたルーリィエ達だったが、今ロビンとクローバー博士は言い合いを始めていた。
「どうして!? 〝歴史の本文(ポーネグラフ)〟を研究すれば、空白の100年に何があったかわかるんでしょ!?」
「ぬおーっ!?お前っ!!?なぜそんなことまで!!? 〝歴史の本文〟を解読しようとする行為は〝犯罪〟なんだと承知のハズだぞっ!!?」
どうやらロビンは自分の能力を使って地下室を覗いていたようだ
「だけどみんな!!?夜遅くに地下室で〝歴史の本文〟の研究をしてるじゃないっ!!?」
ロビンは気付いていた。自分が学者じゃないから自分も仲間に入れてもらえないんだと。この島で唯一自分を受け入れてくれてるみんなの、本当の仲間になりたかった。だからロビンは必死に努力して考古学者になったのだ。
「いいかロビン。確かに…学者としての知識をお前は身につけた。だが、お前はまだ子供だ!!?
我々とて…見つかれば首が飛ぶ。命がけでやっているのだ!!?いい機会だ。
教えておくが…歴史上古代文字の〝解読〟にまでこぎつけたのは、唯一 この「オハラ」だけだ。踏み込むところまで来た我々はもう戻れない。
『全知の樹』に誓え…!今度また地下室に近づいたら、お前の研究所と図書館への出入りを禁ずる!!?いいな!!?」
クローバー博士は強く言い聞かせると、ロビンは黙って全知の樹を飛び出していった。
その様子を見ていたルーリィエは、後を追うわけでもなくどこから持って来たのか新聞を見ていた
「おいクローバー。この〝オルビア〟という女、ロビンと顔が似ているが母親か?」
オルビア、その名前が出た瞬間クローバー博士やその場にいた全員

の視線がルーリィエに集まった。
「お前は何者なんじゃ…ロビンと一緒にいるということはこの島の者じゃないことはわかる。何が目的じゃ」
「なに、我はただあやつと同じ妖のような者だ。そして目的だが、我は今記憶がなくてな。しばらくの間ここに滞在して、この世界のことを思い出すためにここに来た、ということだ」
「記憶を…そうか。そう言うことならここを利用すると良い。その代わりと言ってはなんだが…」
クローバー博士はルーリィエの目的に納得し、図書館の利用を許可した。だが条件付きで。
「…良いだろう、言ってみよ」
「ロビンのことをお願いしたい」
クローバー博士はルーリィエに頭を下げた。
「フッ…良いだろう。最初からそのつもりだ。」
そしてルーリィエはしばらく世界のことと、簡単にだが自分たちのことや、歴史の本文についても説明した。

―――――――――――――――――――――――――――――

空が暗くなって来た頃ルーリィエは、一旦ロビンが住んでいた家に向かい、帰宅していた家族の記憶を通力で多少いじってから、ロビンの気配を辿って森に来ていた。
道中食べられそうな物を集めていると海岸に座り火を焚いているロビンを見つけた。
「まさか火まで起こしているとは、気が利くではないか。」
「ルーリィエ…なんで私は仲間に入らないのかな…」
ロビンは膝を抱え頭を沈めていた。どうやらかなり、精神的に応えてるようだった。
「やつらは貴様を想っての行動なんだろう。…少し魚を獲るから見ていろ」
ロビンとルーリィエは海に近づいた。そしてまたルーリィエの瞳が光ると、
ザパァーンと球体状に海をくりぬいて宙に浮かせた。

中には大量の魚がいた
「この球体をここ〝オハラ〟としよう。魚はこの島の人間だ。
オハラはこの世界が禁止した歴史の本文の研究をやっているな。
そしてクローバーが言ったが、その研究がバレれば容赦なく殺される。ここまでは良いな？」
「うん…」
「そしてここからだが、もし世界が〝オハラが研究をしている〟と知ったらどうなる？」
「この島に確認しに来る。確認して、見つかったら多分…殺されちゃう」
「そうだ。だがそれはあくまで〝研究者〟だ。考古学者ではない」
「あ…」
ルーリィエは成長している魚だけを残し、他の小魚は球体と共に海へと戻す。
「いつそう言った状況が来るか分からない。だからクローバーたちは貴様が成長して大人になり、ちゃんと責任を持てるようになったら考古学者から研究者へと扱ってくれる筈だ。だからそう焦るな。今はまだ顔が合わせづらいだろうが、近いうちまた気楽に話せるようになる。
貴様の努力は奴らも認めている、決して無駄ではない。
良いな？ロビン」
「…うん！ありがと！」
「よし、それではこの魚たちは焼いて食べるとしよう」
ルーリィエは浮かせている魚を、道中で拾った枝を刺して火の方へ誘導し焼き始めた。
それから2人は話しながら魚や果物を食べ、ルーリィエ自作の簡単な小屋を作りそこで寝ることにした。
「ねぇルーリィエ。私ね、ルーリィエとずっと一緒にいたいな。いつか帰ってくるお母さんとルーリィエと一緒に海へ出て、いろんな所へ行って歴史を知っていきたい！そしてね、私が大人になったら…」
「なにをもじもじしている。言いたいことがあるのなら、はっきり

言ってみろ。自らの気持ちを言葉にするのは大切だぞ」
「うん…あのね、私が大人になったらルーリィエのお嫁さんになりたい！側室でもいいから私はルーリィエと一緒にいたい！」
「フッ…フハハハ！嫁か！また面白いことを言うではないか！…ん？なぜ側室って言葉が出た？」
「え…だってルーリィエって王様っぽかったから。喋り方とか食事の時とか凄い綺麗で貴族みたいだったもん」
ルーリィエは自分の行動を振り返ると、確かに食事の時はいつもの癖が出ていたような気がしていた。
だがそれだけでわかるか？と想ったが、実際王だったためオーラが出てしまっていたか！と納得していた
「貴様の言う通り、我は王だった気がするな。今少し思い出せたようだ。そうだな、我が国へ帰り、貴様が大人になったその時、まだなりたいと言うのなら…ロビン、貴様を貰おう」
「本当に!?約束だよ！絶対絶対約束だよ？」
ロビンはばっと起き上がると、ルーリィエの上に乗り顔を見下ろした
「フッそれほど嬉しがるとは愛いやつだ！良かろう！我、ルーリィエが誓おう。必ず我が貴様を貰ってやる」
ルーリィエは今もなお顔を覗いているロビンの頬を優しく撫で、微笑んだ。
まだ会って1日も経っていないが、ルーリィエのその優しい表情を初めて見たロビンは、もう何度目か分からないほど見惚れていた。
ルーリィエの体からは、女を虜にする何かでも出ているんじゃないか、って思ってしまうほどにロビンはメロメロになっていた。
まだ恋愛を知らない子供には、ルーリィエの妖艶なオーラは強すぎたのかロビンの顔は段々と火照っていた。
そしてロビンはその空気に当てられてか、もしくは自分を貰うと誓ってくれたことが嬉しかったのか、徐々に顔を近づけていき、ルーリィエの唇にそっと自分のを重ねた。
「や…約束ね！それじゃおやすみルーリィエ！」

自分からやって恥ずかしくなったのか、ロビンはサッとルーリィエから離れると、持ってきた小さいブランケットで丸まるように眠った。

その一連の流れをされるがままになっていたルーリィエは、ロビンの頭を寝息がするまで撫で続けた。

スゥースゥー

しばらく撫で続けるとロビンから寝息が聞こえ、気配で眠っていることを確認すると小屋を出て、浜辺を歩いていた。

「さて、おそらくあの神がまた何か本に書いていることだろう。まぁもっともなんとなくだが予想はできているがな」

ルーリィエは便利な通力の力でしまった、神からもらった本・神書を取り出し、ページを開くと新たに文字が書いてあった。

「ふむ…まさかこんな細かく書いてあると思わなかったが、そうか…残り数日、出来る限り知識を蓄えるとするか」

本を閉じ、神書を消すとルーリィエは朝になるまで海岸を歩いていた。

---

ザザァーン

クークー

「…あれ?ルーリィエ?」

朝になり目を覚ましたロビンは、隣にいるはずのルーリィエがいないことに気付くと、バタバタと小屋を出た。

小屋を出た所ですぐにルーリィエの足跡がある事に一先ず安心した。

(よかった…夢じゃない)

ルーリィエとの出会いは、ロビンにとってそれほどまでに大事なことだった。そしてロビンは早くルーリィエに会いたくなり、足跡を走りながら辿っていた。

走り始めてすぐ、ロビンの目線の先には大きな山が近づいて来た。

(動く山…じゃない、人?)

山に見えたものは、横になっている人のシルエットをしていることからロビンは人と推測した。そしてよく見るとその巨大な人を持ち上げてこっちに向かってくる人影がいた
「ルーリィエ!」
ルーリィエとわかったロビンはタッタッタッと走って近づいて行った。
近づいてシルエットがはっきりした。
(やっぱり人だ…巨人族かな?おっきい…)
顔を上げてその巨人族を見ていると、ルーリィエがロビンに声をかけた
「起きたか。ところでロビン、こいつを水の場所まで持っていく。念のため荷物を持って後から来い。我は先に行く」
「わかった!すぐ行くね」
ロビンは小屋へと戻り、ルーリィエは巨人族を持ちながらも、凄いスピードで移動し、1分近くで目的地に着いた。その数分後、ロビンが荷物を持って来ると巨人とルーリィエが話していた。
「おーお前さんがロビンか‼?ワシはハグワール・D・サウロという名だ!お前さんは巨人族初めてか?」
「うん」
「どうやらこの巨人は、人に追われているようでな。自分のことは秘密にしてほしいそうだ」
「そーいうことだ。お前さん守ってくれるか?」
「わかった」
「返事よすぎる、ルーリィエと一緒だで。ロビンは絶対無理だで…」
「言わないってば」
「ウソだで~子供が秘密守れるわけねぇでよ~」
「だって私…あなたにそんな興味ないもん」
ロビンの一言にルーリィエとサウロはいったん固まった。そして…
「フッ…フハハハハハ‼?」
「ぷーっデレシ‼?デレシシシ‼?デレシ‼?」

２人揃って大爆笑していた

「ルーリィエまで笑わないでよ！それにしても、でれし？って何ていう意味？」

ロビンはルーリィエに軽く注意し、話を変えようとサウロから出る〝デレシ〟という聞いたことない言葉が気になっていた。

「なにってお前笑ってんだで！」

「笑ってるの？」

「フハハハハハ！ロビン！こやつはな、昔から笑い方が下手でずっとこうらしいんだ！なんともおかしなやつめ！フハハハ‼？」

「ふふっあはははは！変な笑い方っ」

フハハハハ

あはははは

デレシ‼？デレシシシ

３人は楽しそうに笑っていた。

「デレシシシ！ロビン、おめぇ笑うと可愛いでねぇか！もっと笑った方がええで！」

〝可愛い〟そうはっきり言われたのは２人目で、全然慣れてないロビンは昨日ぶりにボッと顔が真っ赤になった。

それから３人はさらに仲良くなり、サウロが来てからの数日間、共に過ごしていた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

【運命の時まで、残り数時間】

スゥースゥー

グゴォー！グゴォー！

フッ…やはりこの巨人のいびきは慣れんな。

ルーリィエはロビンとサウロが寝たことを確認すると、１人海岸を沿って歩いていた。

残り数時間後に、方法は知らんがこのオハラは滅ぶ。そしてこの島の生き残りはロビンだけか…

となると、クローバーや学者は当然だが、この巨人やオルビアも死ぬ。

だがあの神からは～～を助けろと言うことだが。
まずは船でも作るか…ん？
ルーリィエは漂着物が集まる海岸を歩いていると、瓦礫に埋もれている宝箱を見つけた。
「ほう？これが宝箱か。書庫で見た絵本のまんまなのか。して、その中はなんだ？」
ルーリィエは宝箱をぱかっと開けると
……どう言うことだ？確か悪魔の実は希少で、滅多に見ることができないと書いてあったはずだが。これもあの神の仕業か
宝箱の中には唐草模様をした果実が入っていた。
ルーリィエはじっとその実を観察すると、はぁ～とため息をして通力で一旦消した
どんな能力か知らんがとりあえず持っておいて損はないだろう
…さてもう朝まで残りわずかだ
「将来、我の女の1人にさせると約束したからな。しばらく見れん寝顔を見に行ってやるとしよう」
ルーリィエは自身を雷に変え、雷のスピードでロビンの元へ戻った。

# 4話

ロビン達の元へ戻ったルーリィエは、朝になりロビンが起きるまでの間、ずっと頭を撫でていた。
しばらくして、サウロとロビンが起きてからはあっという間だった。
朝食を取り3人でサウロのイカダ作りをした。
予定よりもすぐにイカダは完成し、ルーリィエはサウロに持たせる用の食料を集めに行っていた。
イカダ完成から数十分後にルーリィエが戻ると、そこにいたのは顔色を悪くしたサウロだった。
「どうした巨人、何をそんなに慌てている?それにロビンはどうした?」
「ルーリィエ!?おめぇもここから逃げるんだで!この島は…「バスターコールにより滅びる、か?」…!な、なんでそのことを知ってんだ!?」
ルーリィエの発言にサウロは驚きを隠せなかった。バスターコールの存在を知っているのもそうだが、なによりこの島がそのバスターコールのターゲットにされているのに平然と島にいることに。
「我は悪魔の実の能力者だ。そしてその能力はもう決まってしまった未来が見れるというものだ。よってこの島に何があるのか、誰が生き残るのかも知っている。」
それからもルーリィエは少し嘘をついてだが、自分がこの島の運命を知っていることをサウロに告げた。ルーリィエの情報に、サウロは最初は戸惑ったものの、最終的には納得した。
「つまりはもう決まっちまった運命ってことなんだな!?ワシがそばにいればロビンだけはこの島から出れるんだな!?」
「その通りだ。そしてもう1人ロビンとは一緒にいられないが、この島から助けられる奴がいる。そして我はその者とともに行動することになっている」
ルーリィエがさらに説明していると全知の樹の方で爆発の音が

鳴った。
　どうやら事はすでに始まっているようだった。
「とりあえずルーリィエも助かるんだな!?それだけでいいど！んじゃおめぇ将来絶対にロビンを迎えに行かなきゃダメだで!!絶対に絶対にだで！」
「ああ…貴様とも約束してやる。必ずロビンは我が迎えにいくと。だから貴様は安心して、貴様の思うように動け。我もあとでそっちに向かう」
「わかった！約束だで！ワシはロビンの方へ行く！ルーリィエもあとで来るんでよ！」
　サウロは大慌てでロビンのいるだろう全知の樹の方へと向かって行った。
　ルーリィエは走るサウロの背中を見送ると、今朝にロビンのところへ戻る道中に見かけた、帆にカモメのマークがある船の元へ移動行くと、通力でゆっくりと船を移動させ島の岩陰に隠した。
　それからさらに海岸に沿って移動すると、オールのついた小舟を発見した。
　ルーリィエはその小舟を見た瞬間、何故かその小舟をロビンが使うと感じ、元々サウロのために集めた食料だったが、それらを小舟に乗せ、通力で一時的に食料の姿を消した。
　おそらくロビンがこの小舟を使っている時には通力の能力が解除されているだろう。
　ルーリィエが一通りの準備を終えると、本格的にバスターコールが始まったのか沢山の砲撃がオハラを襲っていた。
「ふむ。予想していたよりも砲撃の数が多いか。人間は何をそんなに恐れているのか」
　ルーリィエは、つまらないと思いながら自身を雷に変えてロビン達の元へ向かった
　その頃ロビン達は…
「お母さん!!?やっと会えたのに!!?…私もここにいるっ！」

ロビンはなんとか母親であるオルビアと再会することができていた。
ロビンはやっと会えた母という存在を失いたくないためか、オリビアにしがみつき離れないようにしていた。
だが、オルビアはオハラに残ると決断していた。
そのため、ロビンを説得していた。
「私たちの研究は、ここで終わりになるけど…たとえこの〝オハラ〟が滅びても…あなた達の生きる未来を‼?私達が諦めるわけにはいかないっ‼?」
「わからない‼?」
ロビンはずっと泣いていた。オルビアはそんなロビンを悟すように言った。
「いつかわか「わかれロビン」…!あなたは…?」
「ルーリィエ!」
「ルーリィエっ‼?」
オルビアの言葉に被せたのはルーリィエだった。ルーリィエの登場にサウロは安堵し、ロビンは今度はルーリィエに飛びついた。
「ルーリィエっ!ルーリィエ‼?」
「フッ、落ち着けロビン。我はここにいる、我の心音を聞くことに集中しろ、すぐに落ち着く」
ルーリィエはロビンが落ち着くまで優しく撫で続けた
「ぅっ…ひっ…グスッ」
「ふむ、落ち着いたな。…それで貴様がロビンの母オルビアだな?」
「…ええ。あなたがルーリィエね?さっきロビンが言ってたわ」
「そうだ。貴様には話したいことがあるが、今は時間がない。おいロビン落ち着いて聞け」
ルーリィエはオリビアを確認だけすると、すぐに自分の胸で泣くロビンの肩を掴み顔を見た。
「いいかロビン。今日でこのオハラは滅びる「なんでそんなこと」黙って聞け!」
ルーリィエは初めてロビンに怒った。そのことにロビンも驚き、

黙った。
　ルーリィエはロビンの頭を撫でると優しく微笑んだ。
「オハラは滅ぶ。それはもう変わらない結末だ。だがロビン、お前が生きる限りオハラの意思は滅びん」
「…！い…し…」
「そうだ。お前がここでクローバー達とともに学んだ知識も、思い出も、お前が生きれば滅びん。オハラはお前の中で生き続ける。これから生き続けると、お前を恐れる者や利用する者が現れるだろう。お前はまだ幼い、何故自分ばかりが辛い思いをしなければいけないんだと、死にたいと思うこともあるかもしれん。もしかしたら考古学者になったことを後悔する時があるかもしれん。
　だがなロビン…」
　するとルーリィエの身体が淡い光に包まれ、ルーリィエは妖狐の姿になった。
「どんなことが起きようと、どんなことを言われようと、お前は自分を、ロビンという人間を誇れ。たとえ世界中の人間がお前を悪とみなすなら、我も共に悪になろう。お前は我のものになるのだろう？それならお前の背負うものは全て、我のものだ」
　ロビンは再び泣いていた。枯れてもなお流れる涙はもう止め方が分からなくなっていた。
　ロビンをギュッと抱きしめると、ルーリィエは今まで付けていた黒い指輪をロビンに渡した。
　その指輪は、妖の世界にいた時から着けていた指輪だった。
「お前にこれを預けよう。必ずお前を迎えに行く、それまで肌身離さず持っておけ。いいなロビン？その指輪を見るたび思い出せ、我は常にお前と共にあると。生き続けよロビン」
　ルーリィエはロビンをサウロの手に乗せた。
「行けサウロ！傷一つなく、ロビンをこの島から出せ！」
「！わ、わかったで！必ずロビンはワシが守る！」
　サウロはロビンを落とさないようにしながら、そっと立ち上がり海岸の方へと走っていく。

「生きて‼?・ロビン‼?・」
オリビアは涙を流した。大粒の涙をボロボロと。
それを横目でルーリィエは見ると、小さく微笑んだ。
「お母さーん!・ルーリィエ!・」
どんどん距離が離れていくもロビンの声ははっきりと聞こえていた。
(生きろロビン。必ずお前を迎えに行く。それまで辛い思いをさせてしまうだろう…すまないなロビン)
ルーリィエはサウロが見えなくなるまで、瞬きもせずずっと見ていた。
そしてサウロの巨体が森で消えると、ルーリィエはオルビアと、今まで黙っていたクローバーの方を向いた。
「クローバー、随分とやられたな」
「わしは別に良い。それにしてもお前さんはどうする気じゃ?・もう助かる手段も…」
「そのことに関してはどうでもいい。我は生き残るからな。そこでだ、お前らに話すことがある」
「…なんじゃ」
「何かしら」
「オルビア。貴様は我と共に生きてもらう」
ルーリィエの発言に2人が驚く。クローバーはどこか嬉しそうな感情も混ざっていたが。
「どういうこと?・私はここでオハラと共に死にたいの」
「だろうな、貴様はオハラを誇りに思っている。それは伝わってくる。だが貴様は生きて我と共に来てもらうぞ、ロビンの母　オルビアよ」
「なぜ私じゃないといけないのかしら?・私には…」
「なにもなかろう?・ここで死ぬだけなら我と共に生きろ。そして我の隣でこの世界を教えろ。貴様らの大事な本を使ってな」
「本を!?・本はあそこでもうすでに燃えている。まだ燃えてない無事な本は、湖に落とすが、それでも残らんだろう。それをどうやって…」
「これをお前に食ってもらうぞオルビア」

クローバーがルーリィエの発言に疑問を持つと、ルーリィエは通力の力で一つの実を出現させた。
「そ、それは…！」
「悪魔の実!?一体それをどこで手に入れたの!?」
「細かいことはいい。この実をお前が食い、本を救え。この悪魔の実はそれに適した能力を持っている」
ルーリィエは確かにその実の能力を知っている。前の世界でも色々と便利だった通力は、この世界でもやはり便利で、どうやら悪魔の実に通力を使えば、その実の能力がわかるようだった。
「でもそれをなんで私が！クローバーさんでも、ほかのみんなだって！」
「この戯けが！貴様はあやつの親だろう！親らしいことをせぬまま、家族としての幸せをあやつを残して、死ねると思うな！我はまたロビンと再開する、その時あやつを最初に抱くのは我でない！親である貴様の役目であろう！ならばここから生き、２人でオハラの意思を繋げ！よいな！」
ルーリィエはオルビアに激怒した。ルーリィエもまた、家族としての愛を知らぬまま生きてきた。小さい頃から家族はなく、王になるためだけに生きてきた。だからルーリィエは幼い時、親の愛を、家族の暖かさを知りたかったのだ。
ルーリィエはオルビアに悪魔の実を渡した。だが、まだオルビアは悩んでいた。はたしてバスターコールから、本当に生き残れるのか。それが今だに信じられなかった。
そんなオルビアの不安を感じ取ったのかルーリィエは、自身の腕を上にあげると腕がビリビリと電気を浴びた。
そして一瞬腕から雷が空へ向かって出ると、次の瞬間
ピカッ！ドオオオオン！
砲撃が飛んできてる方向に、大きな雷が落ちた。
クローバーとオルビアは、ルーリィエが使った雷の力にただ驚いていた。
「まさか…雷を操る…いや、もしやお前自身が雷とでも言うのか!?」

クローバーの顔からはだらだらと冷や汗が流れた
「その様なものだ。だがわかっただろ、我は貴様を救える力を持っている。我と共に来い、必ずお前をロビンと合わしてやる」
ルーリィエは真っ直ぐオルビアを見た。そしてオルビアはとうとう決断し悪魔の実を「…あ、一気に食った方がよ…遅かったか」食った。
オルビアが食う前に、教えといてやろうと思ったルーリィエだったが、すでに手遅れで、オルビアは吐きそうになりながらもなんとか実を全て食べた。
「はぁ…はぁ…。酷い味ね…でもこれで」
「…よし。それでは貴様らは先に行き、大体の事情を話し本を湖に落とせ。我は砲撃を防ぎながら向かう」
2人は指示を聞くとすぐに全知の樹へ向かった。
ルーリィエは雷で大砲を防いでいった。
全知の樹へ到着した2人は学者みんなに事を説明した。
みんなオルビアと本がが助かると知り、大喜びになりながら本をせっせと湖に放り投げていた。そして出せるだけの本を湖に落とすと、オルビアは外に出て湖の前に行くと先にルーリィエが来ていた。
「ここでお前の悪魔の実の力を使え。あとは我が持って行こう」
「わかったわ。……お願い…止まって！」
オルビアが湖に手をかざすと、湖の底に落ちていく本たちが止まった。
これがオルビアが食べた悪魔の実の能力。
その実の名は『トメトメの実』。対象の時を止めることができる能力。
生き物は最大で1時間止めることができ、それ以外のものは能力者自身が解除しない限りは、半永久的に止めることができる。
だがその強力な能力ゆえに副作用のようなものがある。
「上出来だ。あとは我がやろう。貴様は別れを済ませてこい。」
オルビアは素直に頷き、上で見守る学者たちを見た。

「みんな…」
オルビアは泣いた。今までみんなで力を合わせて、世界の歴史の研究をしていた仲間、そして自分の娘であるロビンを支えてくれた家族でもある学者たち。
なんと言えば良いのか分からず涙だけが流れた。
すると学者たちは
「オルビアさーん！笑ってくれー！」
「俺たちの分まで、研究を頼んだぜー！」
「ロビンと幸せになってくれー！」
「ロビンちゃんによろしくね～！」
ワイワイしながら手を振っていた。そしてクローバー博士も。
「オルビア！自分に責任を感じるんじゃないぞ！わしらは充分幸せだった！次はオルビア！自分の番じゃ！しっかり生きて、ロビンと仲良くな！」
「はい…はいっ！…みなざん！ありがどうございまじだ！」
オルビアはばっ！と頭を下げた。どんどん溢れる涙は止まる事を知らず、自分の顔を濡らしていった。
「…行くぞ」
ルーリィエはそれだけ言うと、オルビアでも追いつける速度で走り始め、オルビアも涙を拭いながらも走った。
ルーリィエたちが森の中に入るとき、２人は知恵の樹を振り返ると、なんと島で一番大きい知恵の樹が倒れた。
オリビアはそれを見て泣き崩れると、ルーリィエは仕方ないと思ったのかオルビアを担いで、隠していた船へと向かった。
ルーリィエは道中、ロビンは無事に逃げ切れたのか、サウロの最後を見届けたかったなどが頭にちらついたが、あの神のことだから全てうまく進んだんだろうと、深く考えるのをやめた。
そして船を隠していた場所へ着くと、オリビアを乗せすぐに出航した。妖狐の力の一つ、突風を起こす扇を出すとそれを一振り、二振りとすることで船の速度を上げ、オハラを離れていった。

「世話になった。偉大な学者たちの故郷〝オハラ〟、その名、その姿しかと目に焼き付け二度と忘れんと誓おう！…安らかに眠れ」

オルビアは頭を下げ、ルーリィエは今も砲撃を受け、燃えるオハラをただ黙って見続けた。

# 5話

オハラ消滅から1年とちょっとが経った。
オハラ消滅後、ロビンはオハラの生き残りと言うことで賞金首になっていた。
そしてルーリィエとオルビアは、〈偉大なる航路（グランドライン）〉に直ぐに入ると、オルビア自身も死亡扱いにされているとはいえ、もしものことを考えて2人は〈偉大なる航路〉の前半を早めに渡り終えて新世界に入っていた。
「ルーリィエ、少しいいかしら？」
「ん？何かあったか」
「いやあのね、その…新世界って常識外れな気候や海流が主で、前半の海とはまるで違うから脱落者が多いのだけれど…」
オルビアの言った通り、新世界というのは今までの海の知識など意味をなさない様な、予測不能の海なのだ。オルビアはルーリィエから新世界に行くと聞かされた時は、かなり不安だった。だが今2人のいる海は、とても穏やかで天気も雲ひとつない快晴。果たして本当に新世界なのかと疑いたくなるぐらい落ち着いていたのだ。
「我をそこらの人間と一緒にするでない。わざわざ天候の悪い航路を渡る必要がないからな。そこを避けているだけだ」
「そ、そう。ほんと貴方はなんでもできるのね」
「できて当然なだけだ。だが、我とてできぬこともある。現にお前からポーネグリフの読み方やその他色々と聞いているだろう」
「それでも凄いじゃない。貴方とこうして旅をして1年は経つけど、もうポーネグリフも読めるし、覇気の使い手の話をしただけで色々な使い方を工夫しているんだもの」
現在ルーリィエ達は、船のキッチンでティータイムをしていた。船の舵は、ルーリィエの刀の影を操る能力で分身を作り、ルーリィエ本人が遠隔で指示をしていた。このゆったりスタイルで2人はずっとグランドラインを過ごしていた。
ちなみにキッチンにはロビンの情報が書かれた新聞数枚とロビン

の手配書が飾られている。
「フッ。この世で我にできぬ事などそうそうない。…どうやら話はしまいだ。次の島に着いたようだ。準備するぞ」
ルーリィエの見聞色の覇気が、島を察知した。準備と聞きオルビアは、食器をルーリィエのも一緒に下げ、準備をしに自室へ向かった。
2人が使っている船は海軍のもので、部屋がいくつかあり、2人は各々の部屋で生活している。
しばらくして2人は準備を終え、島に上陸した。
「どうやらちゃんとした地面のようね。ここに来るまでの海も穏やかだったし、ここら辺の天気や海は、新世界の休憩所みたいな感じかしら」
「もうそろそろ船の生活も飽きたしな。場合によってはここを拠点にしてもいいかも知れん。まずは街へ向かうぞ」
ルーリィエは周りをキョロキョロと値踏みをする様に観察しながら歩き、オルビアはその隣を歩いていた。どうやら2人が入った森は小さい物だったのか直ぐに抜けることができ、2人の視線の先には街があった。
かなり先には大きな城のような建物と、城下町があるのだろうその周囲を囲む大きな壁まであった。
どうやら2人が着いた島国だったらしい。
これまで何度か島国に行ったことがあり慣れている2人だったが、今見てる街の様子を見て思わず眉を潜めた
なぜなら2人の視界に入る人々は、誰がどう見ても異質だった
「全員がボロい布のようものを着ているわね…」
「それだけではない。お前も気付いておるだろ?オルビア」
「…ええ。ここにいる全員、女しかいない」
「だが城の方に男の気配が大量にいる。それにあの城の形、世界の様々な国が載っている本で見たことがある」
「そうね私もあるわ。グランドラインにある国で1番奴隷が売られる国、
奴隷国〈レイード王国〉ね」

２人が行き着いた島は、数日に一度、沢山の奴隷を乗せた船が来ては若い男女を買い、男は死ぬまで働かせ、女は物として支配される奴隷国家だった。
「…なるほどな。どの世界にも屑な人間というものはいるわけか」
ルーリィエは前世のことを思い出していた。ルーリィエが統率していた妖の国では奴隷というものがなく差別がなかった。だが人間側では奴隷というものが存在していた。ルーリィエはその奴隷という考えをする人間が大嫌いだった。
「オルビア、ここの国王に用事ができた。城に向かうぞ」
「…一応言っとくけど、この〈レイード〉という国はこう見えて他国との交流はちゃんとしているわ。なにかすれば世界政府も出てくるわよ」
「別に良い。世界政府が来たならばその時だけ、お前を隠すなり変装するなりさせれば良いだけだ」
ルーリィエは歩みを止めることなく、城下町を囲む壁の前で立ち止まった。
「どうやらこの国の男はこの壁の向こうのようね。壁が分厚いし奴隷が侵入しないよう造られたみたいだし、なんか嫌いだわ」
「おそらく何処かに門があるはずだが、面倒だ。このまま行くぞ」
ルーリィエは壁に向かって歩いた。壁が元々なかったかのように歩くと、壁との距離が数ｃｍしかなくなると、突然壁が溶け出した。
ルーリィエが歩けば歩くほど壁は溶けていき、人が倒れる大きさの穴ができた。
「いつ見ても便利ね。太陽の熱の前ではどんなものも焼け溶ける。今だに貴方の能力の底がわからないわね」
「フハハハハ！この世で我の力を便利という言葉で片付けるのはオルビア、お前だけだろう！お前のその言い方も些か慣れ、愛いらしく感じるぞ！
…ほう？見てみよオルビア。これがこの国に住む人間の醜さだ」
「嫌よ。なんとなく想像ができているもの。城まで目を瞑るけど、ちゃんと着いていくから気にしないで進んで良いわ」

「フハハハハ！愛い、愛いぞオルビア！お前の、時々見せるその阿呆な所は我も気に入っている！良かろう、城の前に行くまでは我の後ろを歩くがよい。それと欲しい施設なども考えておけ。すぐに取り掛かれるようにな」

オルビアが返事をすると2人は再び城へと移動を再開した。オルビアは両手できっちりと目を隠している。オルビアは生理的に受け付けない物（主に虫）などがいると、決まって手で目を隠す行動をする。それを見てルーリィエは、目をつぶれば良いのになぜそんな無様な格好をしているんだとオルビアのその行動がツボになっていた。

オルビアが目を隠した城下町とはいったいどうだったのかというと、すべての建物が白く塗られ汚れひとつない綺麗なものだった。そしてそこに住んでいるのだろう男たちの服はどれも綺麗で、派手なものだった。さっきまで見ていた奴隷街とは天地の差があるぐら良い暮らしだと言える。

そしていろんな種類の店があるがどこも男性が店を切り盛りしていて女性の姿が見当たらなかった。

（女の気配はそこらにあるがすべて建物の中、もしくは地下だな。それに全員が疲弊しているのか電磁波が薄い。女は人として扱われるのではなく良くてペットというところか。色々と面倒だが、ひとまずこの国の男達は性根が腐っている者は残らず消すしかないか）

ルーリィエは見聞色とゴロゴロの実を組み合わせて、人間が放つ電磁波のようなものを感知し、周囲の人間の性別や簡単な体調などを察知できるようになっていた。

範囲もどんどん伸びて、今では最大でこの島全てとなっていた。

そのあともルーリィエは色々と今後のことを考えているとあっという間に城門についた。

「…ついたようね」

「ああ、もう目を開けて良い。…さて愚かな王の顔を見るとしよう」

ルーリィエは挨拶がわりに城門に向かって雷を放った。